

東 荊 安 賀 道 遺 跡

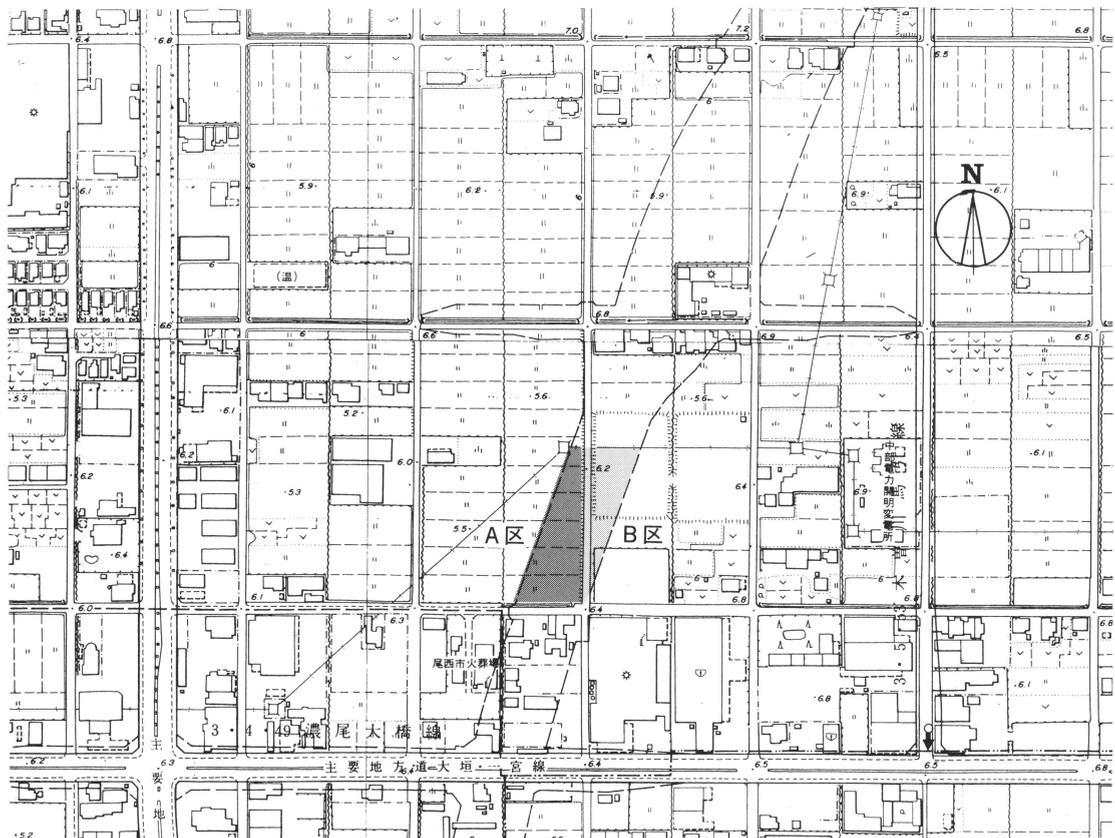
調査の経過 東荊安賀道遺跡は、尾西市開明字荊安賀道に広がる遺跡で、木曾川水系日光川上流域に形成された標高6m前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。

本遺跡は、縄文時代の遺物散布地として県遺跡番号07005で登録されている。本遺跡の北側には、古墳時代の遺物散布地である東向野遺跡（県遺跡番号07002、尾西市開明字東向野）や三味郭遺跡（県遺跡番号07004、尾西市開明字三味郭）が、また、西側には弥生時代から古墳時代の遺物散布地である蒲原遺跡（県遺跡番号07006、尾西市開明字蒲原）が存在する。

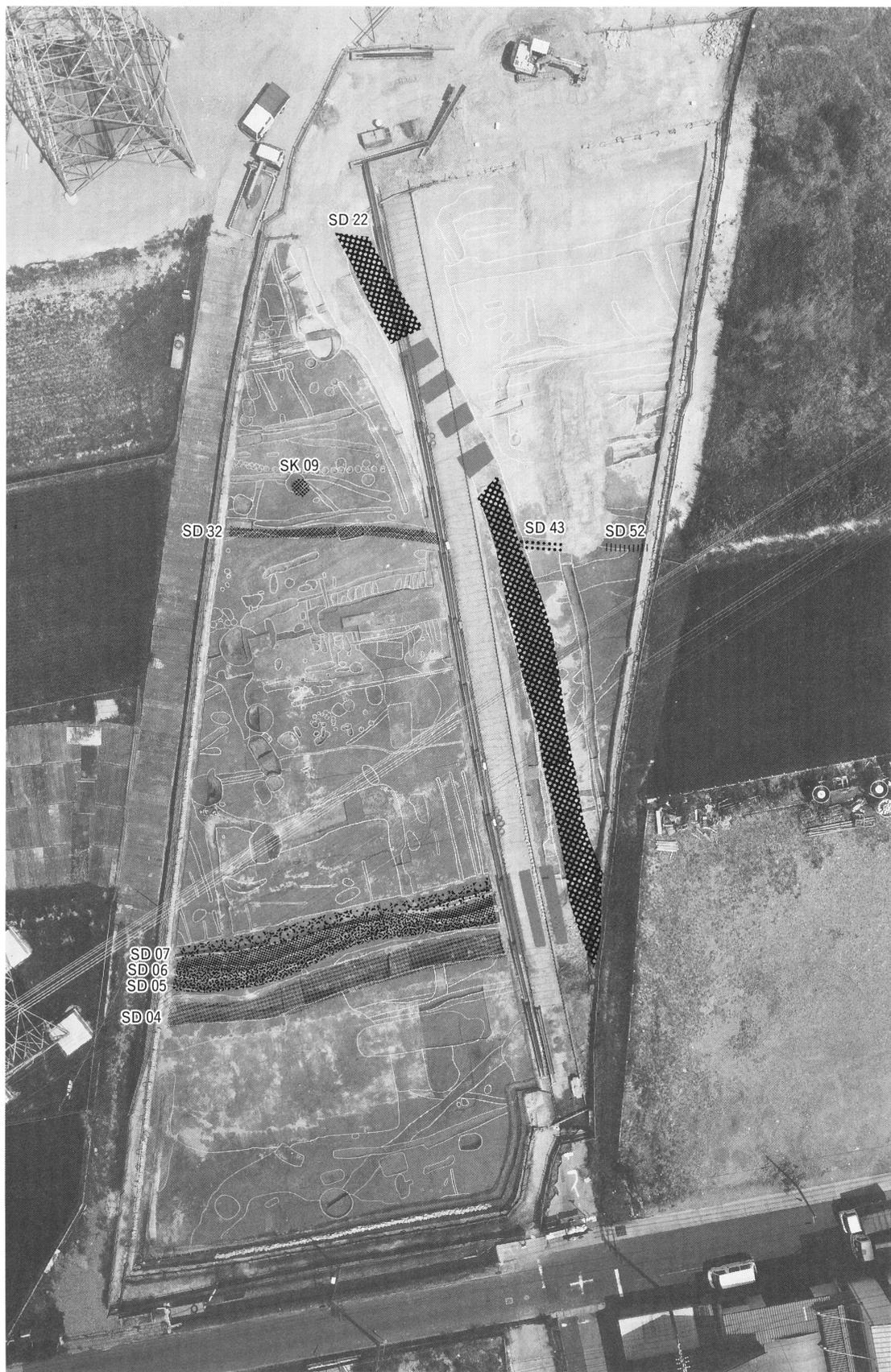
今回の調査に先立って、平成5年に行われた試掘調査では、中世から縄文時代晩期の土器が確認されている。

今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施しており、本年度は平成7年4月より平成7年9月まで、4,424㎡を調査した。調査はA区・B区の2つの調査区に分割して実施した。

（小泉 渡）



調査区位置図 (1:5000)



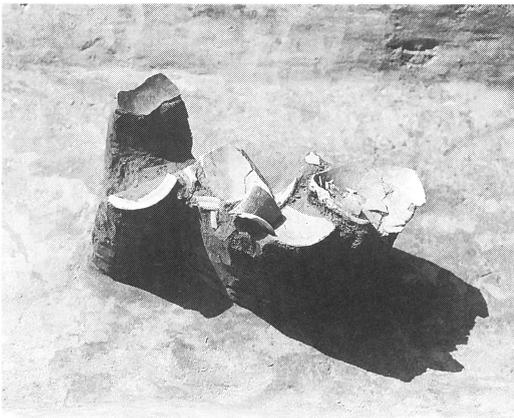
A・B区全影

調査の概要 調査の結果検出できた主要な遺構は、古墳時代初頭と鎌倉時代後期の2つの時期に大きく区分することができる。それぞれの時期の遺構について、調査区ごとに述べていくことにする。

A区 調査区の北側に微高地が展開しており、その縁を区画するように東西に古墳時代の溝であるS D32がある。北側の微高地上には古墳時代の溝や柵列、土坑が展開しており、井戸と思われるS K09も検出された。恐らく微高地上には居住城が展開していると考えられるが、遺跡の中心部分はさらに北西方向に広がっていると思われる。

鎌倉時代後期の遺構としては、調査区南側を東西に横切る4条の溝(S D04~07)が注目される。これらの溝は東側のB区に続き、直交するS D22とともに遺跡全体を区画していると思われる。このS D22は北西方向にやや曲がりながらA区に続いているが、その西側にはこの溝と並行する2条の溝があり、道の可能性がある。このS D22とS D04に囲まれた区域や、S D04の南側には井戸や土坑群などが存在するが、遺跡の中心部分はさらに西側および南側に広がっていると考えられる。

S D04の南側は南西方向に低くなっており、もともとこの部分は湿地化していた可能性



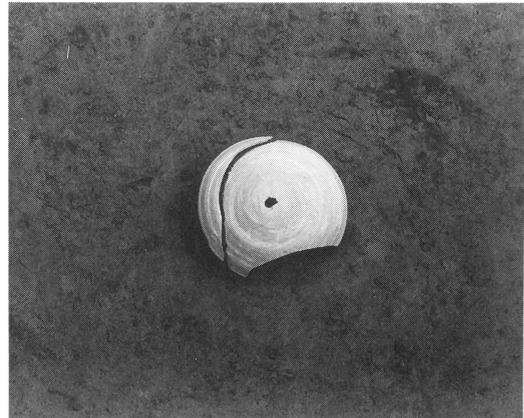
S D 32土器出土状況



S K 09



S D 76土器出土状況



S K 60土器出土状況

がある。そしてこの場所に流れ込んだものと考えられる縄文時代晩期の土器が数片出土している。今回の調査ではこの時期の遺構を確実にとらえることはできなかったが、本遺跡はもともと今回の調査区の東側の範囲を中心とした縄文時代の遺跡として知られており、東側部分にこの時期の遺構の存在が予想される。

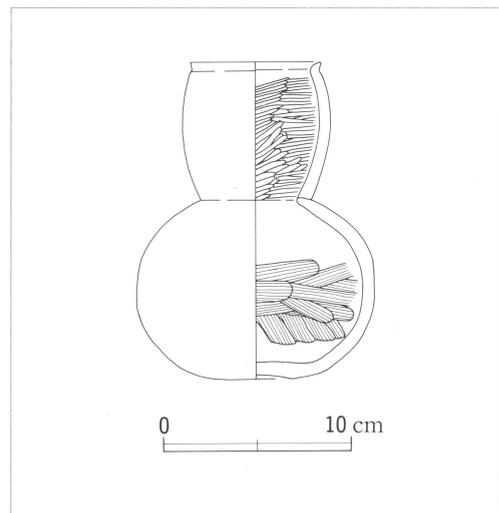
B区 B区は中央に大きな攪乱があるが、遺構も稀薄となっており、遺跡の中心は西側に広がっていることがうかがえる。

A区のS D32は、B区のS D43、S D52へと続いており、ヒサゴ壺などの遺物がまともに出て出土している。古墳時代の遺構としては他に、S D43の北側に周溝と思われる溝が展開しており、墓域の可能性がうかがえる。

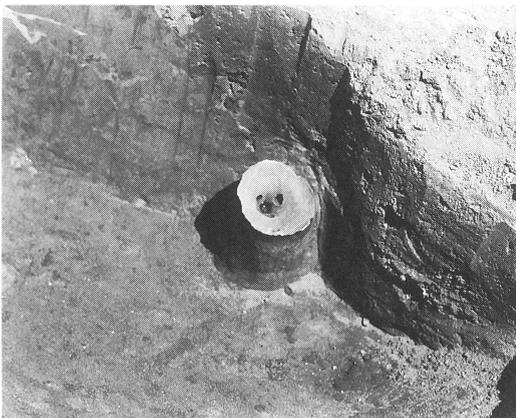
鎌倉時代後半の遺構としては、A区のところで述べたように、S D04などに直交するS D22が南北方向にのびており、やや北西方向に曲がりながらA区の北側へと続いている。さらにこの溝の東側には、攪乱のためによくわからない部分もあるが、S D22に並行する溝と、S D22に直交する数条の溝が存在しており、これらの溝が区画する居住域の存在を南東方向に想定できるかもしれない。
(伊藤太佳彦)



ヒサゴ壺出土状況 (S D 52)



ヒサゴ壺 (S D 52)



S D 43土器出土状況



S D 59土器出土状況